

地域の情報

発達障害通級指導教室修了生への聞き取り ー本人の語りと対話によるライフラインの分析ー

吉橋 哲

通級指導の充実、自己理解や自己決定の指導につながる知見を得ることを目的に、発達障害通級指導教室の修了生3名を対象に面接を実施した。これまでの歩みを振り返るとともに、ライフラインの手法を用いて幸福感・満足感を描いたところ、それぞれが過去の出来事等を客観的に捉え、将来への夢と希望を抱いて歩み始めている姿を確認することができた。修了生の語りや対話からは、多様な体験を通して適正に自己理解が図られたこと、その背景には、良さや強みを引き出し育む指導・支援があったことが推察された。今後の通級指導や特別支援教育の充実につながる情報や知見を得ることができた。

キーワード：通級指導 ライフライン 自己理解

I はじめに

平成18年3月の学校教育法施行規則の一部改正等により、自閉症、学習障害、注意欠陥多動性障害のある児童生徒が通級による指導の対象となってから10年が経過した。この間、通級による指導の対象となる児童生徒は増加し、平成27年5月1日現在では48,286名（前年度46,951名）、対象となる全児童生徒の約58.3%に当たる（障害種別に情緒障害を含む、巡回指導を含む）。また、平成30年度には、高等学校における通級による指導が制度化される。増加する多様なニーズに適切に対応するために、担当者の専門性の更なる向上及び計画的な育成は大きな課題である。

著者は、平成17年度から19年度までの3年間、新潟県長岡市立千手小学校において、市内で初めて開設された発達障害通級指導教室を担当した（開設時は情緒障害通級指導教室）。3年間で指導に当たった児童は延べ約50名であり、自立活動を中心とした個別指導及び小集団の指導と併せて、個別的教育支援計画を活用しながら校内委員会の開催や、在籍校との連携を図ってきた。

発達障害通級指導教室での指導（以下、通級指導）を継続しながらも、就学相談を経て特別支援学級へ在籍を変更する児童も多かった。その後、中学校特別支援学級から特別支援学校高等部へと進学、卒業後は一般就労または福祉就労し、地域での生活を送るケースもみられた。しかし、通級指導修了後の児童の歩みについて知り得たケースは僅かであり、そのほとんどは把握できていない。

著者は、3年間の通級指導担当の後、知的障害特別支援学校へ転勤した。ある時、勤務校高等部との交流で訪れたT高等学校に、著者の担当した通級指導を修了した生徒（以下、修了生）が在籍しており、偶然にも再会し、個別に聞き取りをする機会を得た。進学した中学校での様々な体験、葛藤、高校進学、将来の夢と希望等、修了生から語られた言葉は自己との対話であり、確かな自己理解、自己決定につながるものであった。この

体験から、修了生からの情報は、今後の通級指導のみならず、特別支援教育全体の充実につながるのではないかと考えた。

「『語り』に込められた懐旧や悔恨、希望や不安は、現在の語りの意識や心理の投影である。人間的時間の構造においては、現在は過去と未来の接点ではなく、過去と未来をその内部に含むものである」との指摘がある（大久保，2009）。まさに修了生の語りには、過去の出来事や困難に対する客観的な理解と、適正な自己理解とともに未来を描く明確な意思が込められていると考えられる。本調査では、修了生との面接を通して、これまでの歩みや未来への展望等を聴取し、成長の過程を明らかにする。

II 目的

修了生への面接を通して、自らの歩み、目標達成のプロセス、これからの夢や希望等の情報を収集し、通級指導の充実、自己理解や自己決定の指導につながる知見を得る。

III 方法

1 対象

個別の面接について本人及び保護者の了解を得た修了生3名を対象とした。面接時におけるプロフィールは表1の通りであった。いずれも他者へのかかわりやコミュニケーション、読み書き等に関する行動上または学習上の課題があり、その改善に向けて通級指導を実施した児童であった。

2 手続き

対象の修了生に個別面接を実施した。記録には、主観的な幸福感・満足感の高低を座標の縦軸に、時間の流れ（年齢）を横軸に設定したシートを用いた。幼児期から今までの歩みを振り返り、幸福感の変化について修了生自らが、シートへグラフを書き記すようにした。想起し書き進めながら、自己決定の過程、新たな気づき等を確認していった。グラフが変化する点に着目し、その時の記憶やエピソード、感情の動き等について対話を通して聞き取り、グラフ上に著者が加筆、または別に文章化して記した。面接時間はそれぞれ約120分程度であった。

面接時にフリーハンドでまとめたものを、後日著者が加工・修正を行い、修了生からはデータの確認を得た。なお、グラフは、河村（2000）によるライフラインの書き方を参考にした。

IV 結果

1 Aさんのライフラインから（図1）

（1）ライフラインの概要

学習上のつまずき等から、小学校中学年までは大きなラインのうねりがみられた。小学校2年では、自分の言い分を丁寧に聞いてもらえたことが印象に残っていた。そこから一旦は上昇したものの、中学年までは下がり続けた。小学校5年の通級指導の開始から、高学年では一気に上昇へ転じた。学習の楽しさ、活躍の場面が数多く紹介された。進学した中学校では野球部に所属した。Aさんの強みが発揮され、3年時にはレギュラーとしてチームに貢献した。

高校では新たにハンドボール部に所属した。ジャンプ力や球速が評価され、1年時から試合に出場するようになった。その後も、ラインは一度も下降することなく上昇を描いた。

（2）対話を通して語られたこと

①学習について

中学校では、自ら基準を設定して学習へ臨んだ。それは、「他の人と同じように学習する」「授業をきちんと受けノートを取る」「黒板を写す」であった。中学校入学を期にこのような点を意識し、授業への参加を心がけた。

②今、思うこと

学習では、まず「教科書を読む」「プリントを読む」ことが自分のやり方になった。そして、自分の力量、苦手と得意、自分に合っていることは何かが分かることが大切だと感じた。周囲の協力があり、自分を理解してくれる人の存在が大きかった。今は「できないから挑戦する」「日々できることがありうれしい」と感じている。今後はスポーツ系の心理学を学びたい。

2 Bさんのライフラインから（図2）

（1）ライフラインの概要

ドッジボールの不正や微妙なジャッジ等、自分の思いを抑え切れずに、友だちとトラブルになったことを語った。小学校4年からは通級指導を開始した。高学年では、小説づくりや読書等に楽しさを見い出した。幼児期から水泳を続け、中学校の部活動やクラブチームでは高い成績を上げるようになった。特にクラブチームでは、幼児や低学年の指導を任される立場になり、「人とのかわりによる心地よさを知った」と語った。中学校

から高校へと水泳を中心とした生活の中で、指導者になることの夢、スポーツ関係への進学、オリンピックへと関心を広げていった。ラインは一度も下降することなく上昇を描いた。

（2）対話を通して語られたこと

①後輩に伝えたいこと

自分は水泳が好きでずっと続けてきた。好きなことを見つけることが良い。そして、「見て、歩き回って、いろいろやってみる」ことが良いと思う。水泳以外に、剣道や弓道、写真をやった。チャレンジする中で、熱中できるものが見つかると思う。

②これからのこと

今後はスポーツ関係に進み、できることならオリンピックの機会を生かして、いろいろな人とかかわりながら成長していきたい。

3 Cさんのライフラインから（図3）

（1）ライフラインの概要

保育園の頃からの記憶があり、集団生活にうまくなじめなかったことを語った。小学校入学後はラインが上昇した。小学校2年から通級指導を開始し、生活全般が落ち着いてきた。中学校では、敬語の使い方や課題の提出等、学校生活に慣れずラインは下降した。その後、理系科目を中心に学習の理解が進み、敬語にも慣れてラインは上昇した。念願だった志望校の入試に一度は失敗するが、その後一般入試を経て合格した。進学後は、専門科目の習得に不安を感じながらも努力を続け、海外研修生に推薦された。そこから新たな上昇カーブを描き始めた。

（2）対話を通して語られたこと

Cさんはこれまでの歩みから、自己理解を深めてきた。面接・対話を通して、このことが強く感じられた。

①自分自身について

穏やか、落ち着いていて冷静なところは良いところだと思う。相手を思いやれないこと、臨機応変な行動は苦手である。

専門科目、理論的な考え方は得意である。「なぜそうなるのか」を考える授業が良いと思う。塾では、理解できるまで教えてもらった。国語は苦手で、特に主人公の気持ちや小説の理解が苦手である。時間の流れや、複雑な人間関係を捉えることが難しい。そこは覚えるしかないと思い、暗記法を使った。

自分の言動について、昔よりは適切なやり方が分かるようになってきた。社会のルールなど、親から教えてもらった。以前、友だちから悪口を言われて不快だったので、自分は言わないようにしている。体験は大事だと思う。

②将来について

表1 対象者のプロフィール

	Aさん	Bさん	Cさん
面接時期	201X年8月	201Y年2月	201Y年5月
面接時の学年	高等学校3年	高等学校3年	高等専門学校2年
通級指導期間※1	約1年	約1年9か月	約1年5か月
現在の状況※2	大学1年（18歳）	大学1年（18歳）	上記学校2年在籍（17歳）

※1 指導期間は筆者が担当した期間

※2 201Y年度現在

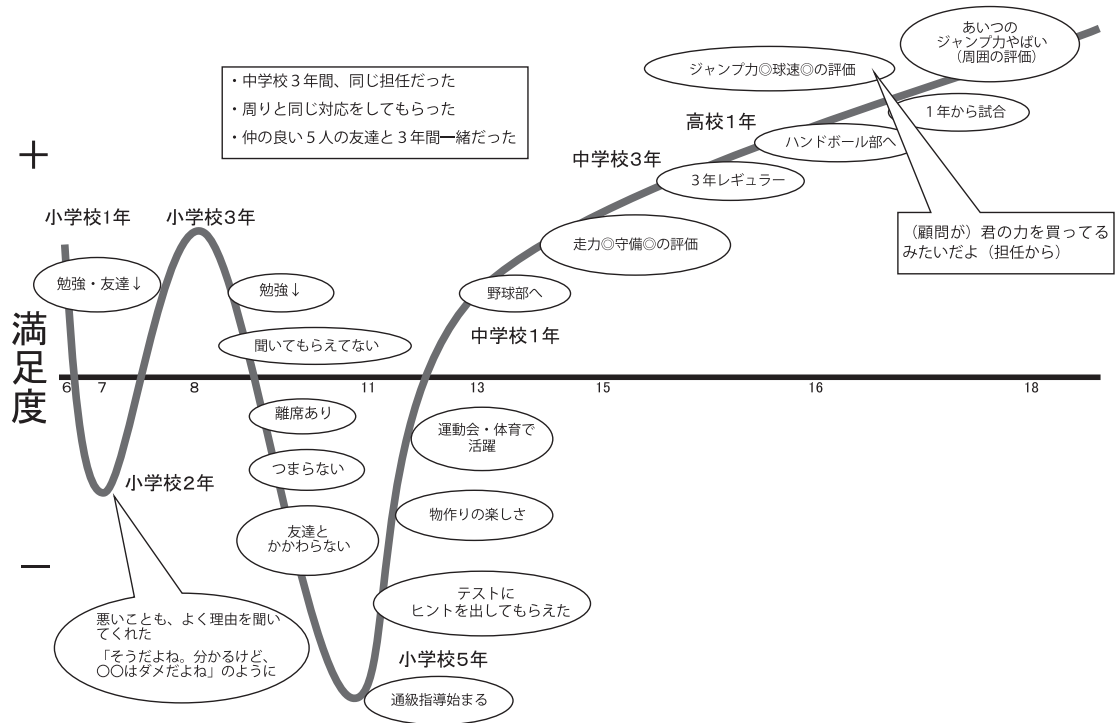


図1 Aさんのライフライン

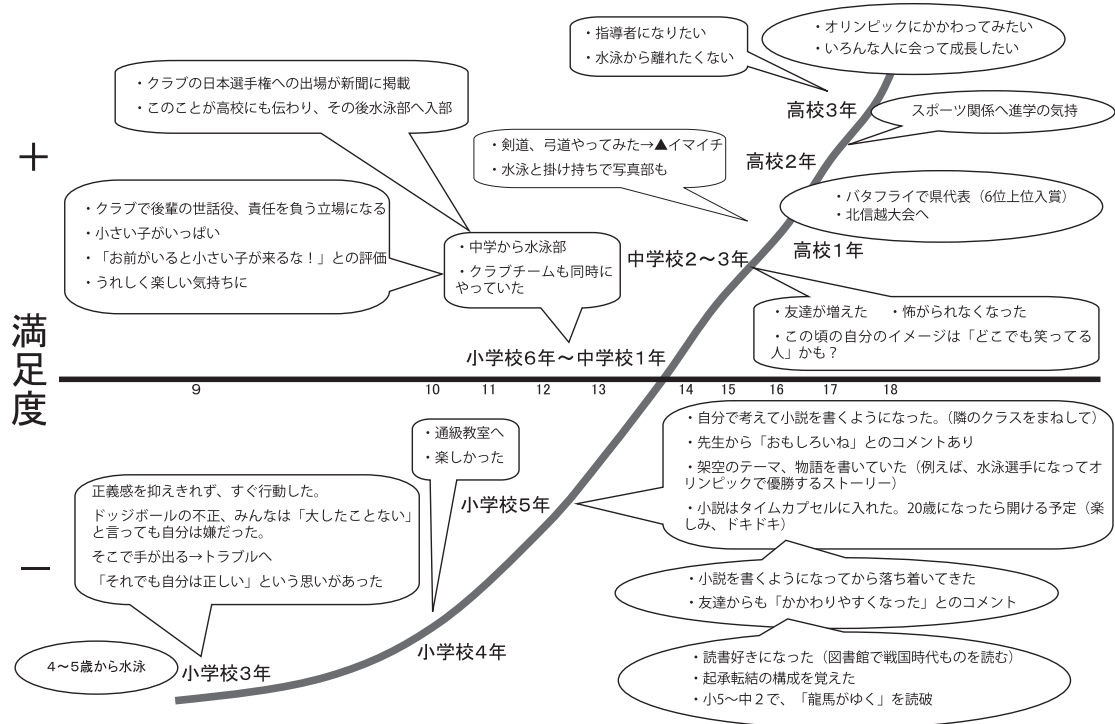


図2 Bさんのライフライン

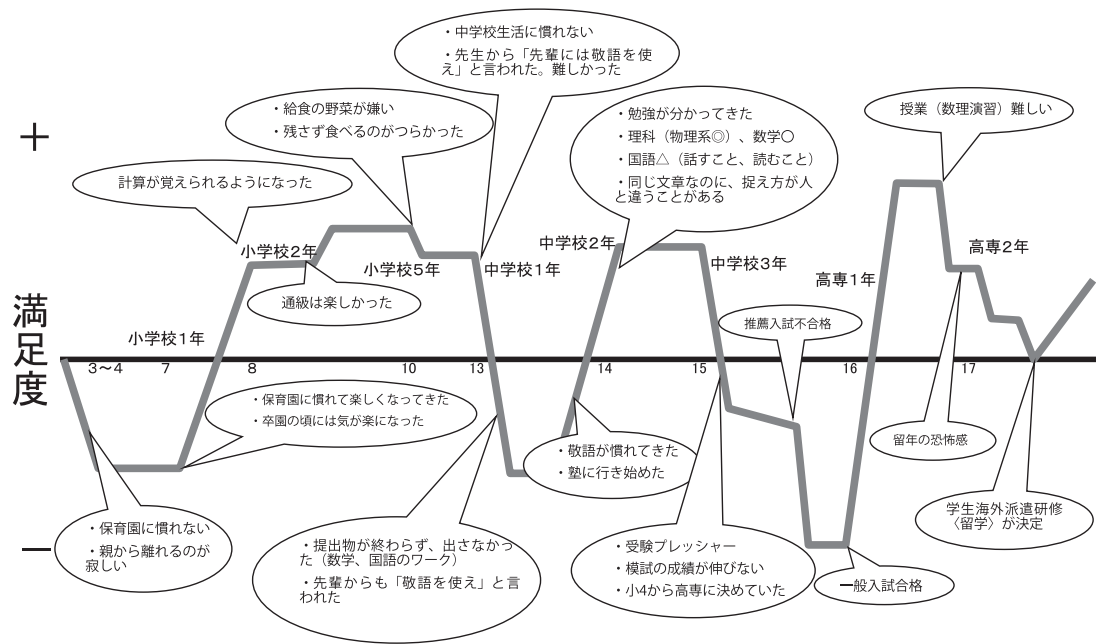


図3 Cさんのライフライン

将来は、専門科目を教える先生になりたい。じっくり研究し、自分の好きなことを教えたい。共同研究だと息が合わないことがあるので、一人でロボット系の研究をしたい。自閉症の人の気持ちが読めるシステム開発もいいなと思っている。

V 考察

面接した3名は、いずれも著者の通級指導修了から既に8～9年を経過している。その間に、自分の強みと弱みを含め、適正に自己理解を深化させた。Aさんからは自分に合った学習のやり方、Bさんからはチャレンジする気持ちの大切さ、Cさんからは自分の特徴を踏まえた問題解決の方法等が語られた。それぞれが様々な体験を通して学び、自らを深く理解し、身に付けた方略であると考えられる。著者は、日本特殊教育学会第54回大会において、「共生社会の実現を目指す地域からの発信—学校教育と地域社会が目指すもの—」をテーマに自主シンポジウムを企画した。特別支援学校高等部の生徒を対象に、将来の地域生活に向けて求められる力について、いくつかの取組を紹介した。指定討論において村中(2016)は、「他者評価(教師、仲間、家族、雇用者等)を多様に多重に重ねることで確かな自己理解が育まれ自己決定につながる」と述べている。3名の語りからも、中学校や高等学校等において、多様な評価を通して自己理解が育まれ、自己決定の力や態度へつながったことが推察される。

3名はそれぞれ、将来への大きな夢や目標を抱いて力強く歩み始めている。ライフラインの終末が上昇していることから、

このことが伺える。Aさんは体育や部活動での活躍が、Bさんは小説の執筆や水泳がそれぞれ高く評価された。Cさんは、疑問を深く追求する姿勢と、得意な理系の学習を通して自信を深めた。良さや強みを引き出し、賞賛し伸ばす指導・支援が背景にあったことが伺える。学校種が変わっても、このことは継続されてきたと考える。自信、自己有用感を育む取組を教育活動の基盤と捉えたい。

可能であれば、さらに時間を経た後に改めてライフラインを描き、その後の歩みを聴取したい。今後は、職業的自立、経済的自立に向けて、人生の大きな流れ、うねりが予想される。青年期における彼らの語りから、特別支援教育を捉え直す視座を得たい。

文 献

- 河村茂雄 (2000) 心のライフライン, 誠心書房.
- 近藤和行 (2015) 発達障害のある児童生徒を指導する通級担当教師の職能成長に関する調査研究, 上越教育大学大学院修士論文.
- 文部科学省 (2015) 平成26年度通級による指導実施状況調査結果.
- 文部科学省 (2016) 平成27年度特別支援教育資料.
- 村中智彦 (2016) 日本特殊教育学会第54回大会自主シンポジウム84「共生社会の実現を目指す地域からの発信」における指定討論から.
- 大久保孝治 (2009) ライフストーリー分析, 学文社, 11.